

## 牛群検定通信 No169

### ～ 栄養管理と観察方法（5） ～

先月号に引き続き、栄養管理と観察方法についてのお話です。今回は体表面の毛色、斑紋とフケについての話でしたが、今回は、蹄の間の部分の色や膨らみについて述べていきます。

蹄の間の部分の色や膨らみは、エサのバランスや量、ルーメンアシドーシスの傾向などを示すものと考えており、次の4段階に区分します。

- ①色がない状態
- ②オレンジ色
- ③少しピンク色
- ④濃いピンク色（肉も盛り上がっている）

これらの状態が意味するものは、次のようなものであると考えています。

①は量やバランスに問題がない状態で、ルーメンに負担がかかっていない状態です。泌乳最盛期の多量の飼料を摂取している牛でも適正な飼料給与を行っていれば、このような状況を示しています。実際酪農現場では、泌乳最盛期の給与飼料が適正かどうかを判断する最も簡単なチェック方法となっています。

また、色とは別にどの段階でも白い粉がたくさん付いているような場合がありますが、これは④の状態が長く続いた名残り、牛が傷んだ後、回復してきたことを示しています。

②は少しルーメンに負担がかかっていますが、程度は軽いのでほとんど問題はない状態で、また、回復基調にあるときに見られる色ですので、特に対策は必要ありません。

③はルーメン内のデンプンなど可溶性炭水化物が多く、少しルーメンアシドーシス気味のときに見られる状態です。分娩後に急激に飼料給与量を増加したときや最近では乾乳期でもこの状態を示す牛が出てきますので注意を要します。また、このような状態では蹄病を起こしている可能性が極めて高く早期の治療が必要となります。

④は必要以上の濃厚飼料を給与している場合や、エサのバランスが悪く、デンプン系が過剰である場合になり、ルーメン内のPHが低下し乳酸などが生成されるような状況、ルーメンアシドーシスと判断してまず間違いありません。ルーメンの負担も大きく、飼料給与において1回の給与量や給与間隔、重曹の給与、ルーメンで分解されるエネルギーとタンパク質とのバランスの修正を行う必要があります。

(渡邊)